

新連載

事蹟研究

松翁の足跡

其の一

独立の地・猪飼野

PHP総合研究所第一研究本部長

佐藤悌二郎



さとう・ていじろう
昭和三十一年新潟県生まれ。五十五年、慶應義塾大学文学部卒業後、PHP総合研究所入所。研究員としてPHP理念および創設者松下幸之助の経営観の研究に従事。『松下幸之助発言集』全四五巻をはじめ松下幸之助に関する多数の書籍・テープ集等の原稿執筆、編集、制作にあたる。平成九年より松下理念研究部長。松下社会科学振興財団主任研究員を兼務。著書に『松下幸之助 成功への軌跡』、『経営の知恵・トップの戦略』、『各経営者に学ぶ「商道」実践コース』（いずれもPHP研究所）などがある。

拙著『松下幸之助 成功への軌跡』（一九九七年）は、松下幸之助の考え方がどこに源を發し、どのように形成されてきたのかを考察したものだ。併せて松下幸之助の事蹟について不明な点や事実関係を明らかにすることも一つのねらいであった。しかし、不明なところが依然残されたため、その後も引き続き新事実の発掘に取り組んできている。一方、『成功への軌跡』を読まれた方からも、松下の事蹟についていろいろな指摘や情報が寄せられている。本シリーズは、そのなかから明らかになったことや、逆に、これまで自明と思われていたことであやしくなったこと、あるいは訂正が必要と思われることなどを中心に、改めて松下の足跡を辿り、さらなる真実に迫ろうとするものである。

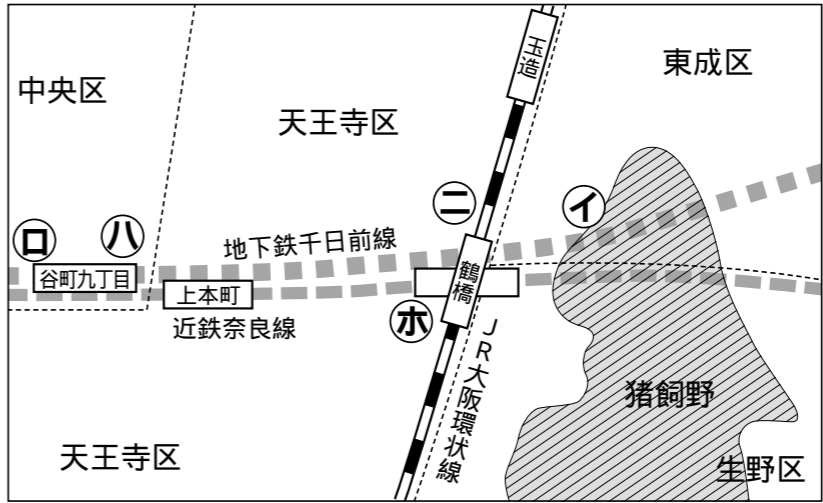
独立してソケット製造に着手

「工場は私の住んでいる平屋（当時猪飼野におった）の二畳と四畳半のうち、四畳半の半分を落として土間にした」
松下幸之助は、自叙伝『私の行き方考え方』のなかで、大正六年（一九一七）六月に大阪電燈を依頼退職してソケットの製造準備に入ったときのことをこう記している。

松下電器の歴史は、大正七年（一九一八）三月七日、大阪市北区（現・福島区）西野田大開町で、「松下電器器具製作所」の看板を掲げたときに始まるが、この「猪飼野」の、工場というにはあまりに貧弱な住居兼工場こそ、まさに松下幸之助独立の地であり、事業家としての出発の地

あった。

猪飼野は現在の大阪市の鶴橋と今里の中間あたりの名称で、その地域は南北二四〇〇メートル、東西八〇〇メートルに及ぶ「左図斜線部分」。『猪飼野郷土誌』（一九九七年）の記述によれば、猪飼野は『日本書紀』の仁徳天皇に「猪甘津」と記されている千数百年の歴史をもつ由緒ある地



松下幸之助ゆかりの鶴橋周辺略図

跡（以下「軌跡」と略す）でも、それをそのまま採用し、「現・大阪市生野区」としたのだが、それに対して、『軌跡』を読まれた、鶴橋在住の足代健二郎氏（あじろ書林代表）から疑問が呈されたのである。

さきに挙げた『猪飼野郷土誌』を編集・執筆した一人でもある足代氏によれば、猪飼野は現在、正確にいうと、近鉄奈良線（松下が住んでいた当時は大阪電気軌道といい、大正三年（一九一四）四月、上六 奈良間が開通した）によって、大阪市東成区（北側）と生野区（南側）に分断されており、東成区にも一部かかっているという（右図参照）したがって、生野区だとは断定できず、東成区の可能性もある、否、東成区のほうがむしろ可能性が高いように思われるというのである。

それはなぜか。その根拠として、足代氏は、松下が住んでいた大正六年当時の猪飼野の状況を挙げる。氏によれば、当時の猪飼野は、まだ田んぼばかりの状態で、大正八年（一九一九）に耕地整理が始まってから家が建ち始めたという。つまり松下が住んでいたのは耕地整理の直前であり、人家がばらばらとしか建っていないかったか、たまたま松下が借りていたところだけ建っていた状態だったと考えられる。しかも、ある程度人家がかたまっただけで、たまたま松下が借りていたところだけ建っていた状態だったところから判断すると、松下が借りていた家はその耕地整理の区域外にあったと考えられる。そして東成区に入っている部分がまさにその耕地整理から除外されていた区域（右図の近鉄線よ

名だという。それが「猪飼野」となったのは、大和朝廷に從属した職業集団の猪飼部が猪飼野に存在していたことによるのではないかとということである。

しかし、現在、猪飼野という地名を地図で認めることはできない。昭和四十八年（一九七三）の町名改正でなくなったのである。今では「猪飼野新橋」といった橋名などに、その名残をとどめているにすぎない。

松下が住んでいた大正六年頃の猪飼野は、大阪府東成郡鶴橋町大字猪飼野とあった（明治二十二年（一八八九）、政府の市町村制実施にあたって、猪飼野、木野、小橋、東小橋、岡の五力村が合併して鶴橋村となり、大正元年（一九一一）、鶴橋町となった）。

住んでいた借家は猪飼野のどこに

この猪飼野のどこに幸之助・むめの夫婦は住んでいたのだろうか。これについては資料が残されておらず、正確な場所はわかっていない。ところが、この件に関して、有力な情報が寄せられた。

それはどういうものかというところ、「猪飼野」については、『松下電器五十年の略史』（一九六八年）に、「当時住んでいた東成郡（現在は大阪市生野区）猪飼野の借家」とあるほか、『道は明日に』（一九七四年）、『松下電器・社史年表』（一九九一年）等、すべての関連資料が、猪飼野を現在の大阪市生野区としている。そこで、『松下幸之助 成功への軌

り上の斜線部分」であった。したがって、東成区のほうが確率が高いというわけである。

それともう一つの根拠として、足代氏は、当時の鶴橋の停留所（現・近鉄鶴橋駅）は、現在の位置より少し東側にあったが、その停留所から歩いて猪飼野に入ることになると、旧平野川を渡らなければならなかったことを挙げている。すなわち、旧平野川の東側にあつた猪飼野に入るには、必ず橋を渡らなければならない。そして、その橋はどこかと考えたとき、東成区に位置する亀之橋（前頁略図参照）という橋を渡って猪飼野に入った公算が大きい。というのは、亀之橋以外の橋は、耕地整理以後に架けられた橋で、松下が住んでいたときには存在しなかったからである。しかも亀之橋の周辺は早くから開けた場所であつた（次頁の絵は、大正十二年（一九二三）頃の亀之橋をスケッチしたもので、当時の有りようが偲ばれる）。

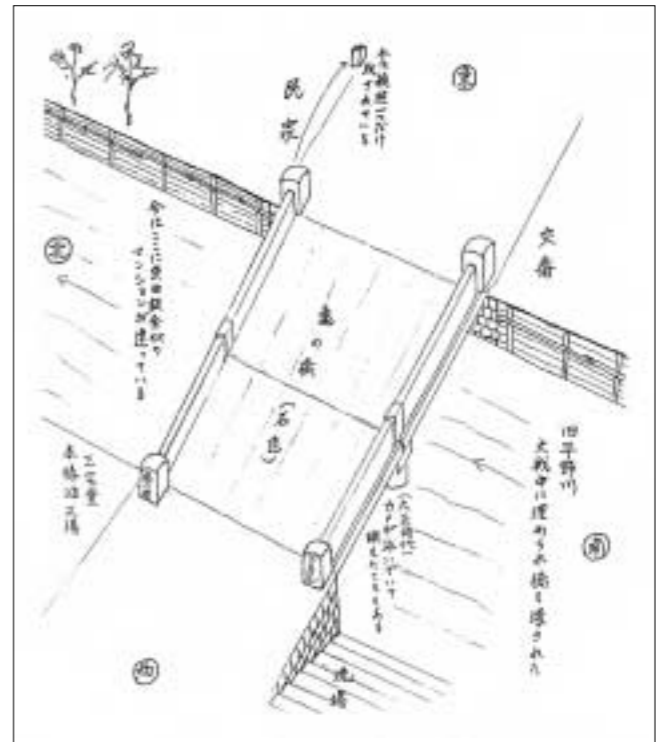
このようなことから、足代氏は、松下が住んでいた場所を生野区とするのは速断ではないかと指摘するのである。そしていろいろ調べ、また地元の人に聞き込みをした結果から、借家のあつた場所としては、近鉄奈良線の北側、現在の町名でいうと、東成区玉津二丁目あたりの可能性がいちばん高いとしている。

どのような変遷を辿り、いつ猪飼野に

幸之助・むめの夫婦は、いつから猪飼野に住むようにな



大正12年頃の亀之橋(堤権次郎氏作)



平成10年8月に昭和5年の頃を思い出して描く
(村川貞三氏作)



現在ひとつだけ残されている亀之橋の親柱

ていた森田延次郎氏(松下が独立したときに参加した二人の元同僚のうちの一人・故人)は、下宿は会社の先輩の家で、玉造にあつたといっている(松下電器『社史資料』No.6 一九六二年)。さきの高津営業所までの距離とも概ね合致するので、下宿していた金山氏の家は、この玉造にあつた先輩の家にもまず間違いのないと思われるが、正確な住所はつまびら

つたのだろうか。これについて資料が残されておらず、その正確な日を設定することはできない。もともと、猪飼野に限らず、松下が大坂電燈に勤めていた頃に住んでいた場所やその時期については不明な点が多い。参考までに、残された情報を列挙すると、まず、『私の行き方考え方』で、松下は、十六歳から二十歳で結婚するまで、金山という会社の同僚の家に下宿していたと書いている。その家は、勤め先の高津営業所から二キロほどのところにあつたという。また、松下と一緒に下宿し

かでない。

それから、結婚したとき(大正四年(一九一五)九月四日「幸之助・むめの夫婦は二階借りをしている。四畳半と三畳の二間で、家賃が三円だった」という(石山四郎氏との対談・一九七二年ほか)。そこは、むめの夫人によれば、高津営業所に近く、十分くらいで行けるところだったというが、『難儀もまた楽し』(一九九四年)、これも住所は明らかでない。

この時期のことで、唯一住所がはっきりしているのは、松下が改良ソケット(松下式ソケット)の実用新案を出願したときである。大正五年(一九一六)十月三日に出願したそのときの住所は、大阪市東区東平野町四丁目百十番地八(現・中央区上汐二丁目五番七号あたり)となっている。そして、それからおよそ八カ月後の大正六年六月には、猪飼野に移り住んでいたというわけである。

このように、この時期に住んでいたところについてはわずかな情報しかなく、その足取りを辿ることは極めて困難で、不明な点が多いが、これらのことについても、さきの足代氏から新たな情報が二、三寄せられている。

足代氏の調べによると、松下が独身時代に下宿していたという金山氏は、名前を乾治といひ、明治二十五年(一八九二)生まれであることがわかったという。したがって松下より二歳年長ということになる。しかも金山氏が、戦前から戦後にかけて、現在の東成区玉津三丁目、つまり松下が独立時に住んでいたと思われるところ(玉津三丁目)の近

くに住んでいたということも、そこにあつた金山氏の家を買った人の証言からわかったという。おそらく金山氏は、結婚か何かのおりに、松下が独身時に下宿していた玉造の実家を出て一家を構え、ある時期に玉津三丁目に移り住んだのであろう。

そして、何よりも、この金山乾治氏に関する情報で注目しているのは、金山氏が、その家を買った人に、松下さんは舟橋町二(現・天王寺区舟橋町)で二階借りをしていたと語っていたということである。となると、松下が舟橋町にいたのはいつのことなのか問題となる。大正四年九月に結婚したとき、幸之助・むめの夫婦は二階借りをしたということであるから、そのときのことだとも考えられるが、勤務先の高津営業所に歩いて十分ほどで行けるところだったということなので、舟橋町では時間的に無理がある。通勤時間からすれば、結婚時の住居はむしろ、改良ソケットの実用新案を出願したときの東平野町四丁目百十番地のほうが可能性が高いと思われる。

今、静かな話題に

では、舟橋町で二階借りをしていたという金山氏の話は嘘なのか、というと、そうともまた断定できない。というのは、舟橋町の南に隣接する東上町ホの東上湯に松下がよく入りに来たという、戦前、東上町の西隣の筆ヶ崎町に住

んでいた人の証言があるからである。しかも、むめの夫人の回顧談に、あのころ筆者注・ソケットを作り始めた頃、家の前を走っていた城東線（現在の大阪環状線）に子供がひかれましてね、その首がごろんとちぎれて……。私、朝は五時に起きてたんで、なにげなく見ましたら線路にごろんと……それで、こわくなって、宿替え（引っ越し）したんですわ、大開町に」（『女性自身』一九七六年五月八日・十五日合併号）とあり、これも舟橋町にびつたり一致する。

もっとも、むめの夫人のいうとおりだと、この出来事は大開町に移るすぐ前の猪飼野にいたときのことになる。しかし、猪飼野は城東線とは接していないので、新たな食い違いがでてくる。よって、この時期の松下の動向については、さらに調査と整理が必要だが、ある時期、舟橋町で二階借りをしていたということは、十分ありうることであろう。しかしいずれにせよ、猪飼野に移り住んだ時期については、まったく手がかりがない。

さらにいえば、なぜ松下が勤め先から遠くなる猪飼野にわざわざ居を移したのかということも疑問として残る。しかも、結婚して二階借りをしたときは四畳半と三畳の間で、家賃が三円であったのに、猪飼野の借家は、四畳半と二畳の間で、家賃が五円五十銭もする。狭くなって、しかも家賃が高くなるところになぜ移ったのか。むめの夫人によれば、猪飼野の借家は大きな家に隣り合つての一戸建てだったということなので（『難儀もまた楽し』）、狭くて、少々高くても、一戸建てのほうを選んだのだろうか。しか

し今となっては知るすべがない。

なお、かつて猪飼野と呼ばれた地域には、今日、在日韓国・朝鮮の人たちがかなり多く在住している。『猪飼野郷土誌』によれば、その人たちの猪飼野への移住は、大正年代半ば頃から始まったという。それは、大正八年（一九一九）に始まった平野川の開削工事に携わった人たちが家族・近親者呼び寄せ、居住区域が広がったためだとも、それ以前に大阪の紡績工場や造船所で働くようになった工場労働者が二軒三軒と初期集落をつくり、それが大きくなったためだともいうが、大正十一年（一九二二）に済州島 大阪直行航路が開かれたことと、大正八年から始まった猪飼野地区を主たる対象とした耕地整理によって、安価な住宅地が供給されたことが特に大きく与つたといわれる。しかし、松下がソケットの製造を始めた大正六年頃の猪飼野は、在日韓国・朝鮮の人たちはもとより、住民の数そのものがまだそれほど多くなく、今日からは想像もつかないほど田んぼの広がる一農村にすぎなかつたのである。

それからはや八十有余年の歳月が流れ、今やこの地がワールド・エンタープライズ発祥の地であったことを知る人はまれである。しかし、聞けば、さきの足代氏等の働きかけによって、地元の人々の間で今、松下の独立の地であったことや、その住まいし、工場とした場所がどこであったかということが、静かに話題になっているという。八十年の時を経て、独立の地・猪飼野で、新たな「幸之助伝説」が生まれようとしているのかもしれない。